

まち さん ぼ
街散歩

さいたま

中山道を行く

さいたまスーパーアリーナ



さいたま

2003年5月、旧浦和・旧大宮、旧与野の3市が合併し、100万人都市・さいたまが誕生した。その南北を貫く中山道は、古くから人・物・文化の往来する道として栄え、江戸時代には、加賀前田家をはじめとする大名行列も通ったという。今回は、さいたま市内にあったとされる中山道3番目の宿場・浦和宿から、4番目の宿場・大宮宿まで、昔の旅を偲びながら歩いてみる。



氷川神社 参道

楼門

額殿

▲大宮の語源は、この武蔵一の宮、氷川神社を「大いなる宮居」と崇めたことに由来する。古来より格式が高く、歴代皇室の崇敬を受け、源頼朝をはじめ、北条氏、足利氏の諸将も敬ったという。埼玉、東京などに点在する氷川神社の多くは、この分霊を移し祀ったものだとされている。

▶1885年、埼玉県初の県営公園として誕生。正岡子規、夏目漱石、高浜虚子など、文化人も多く訪れたという。園内には、約1200本の桜が生育し、花見の名所として親しまれている。

大宮公園





さいたま新都心

◀旧国鉄大宮操車場跡地を中心に整備され、2000年5月に街びらきが行われた。国の行政庁舎をはじめ、県内一の高さを誇る「明治生命ランド・アクシスタワー」など、超高層ビルが建ち並ぶ。各種イベントが開かれる「さいたまスーパーアリーナ」も有名。



Chatting Tower



出発は、中山道沿いの「調神社」。狛犬ならぬ狛兎がいるという。確かに、兎の親子像が1対、入口で私たち参拝客を出迎えてくれる。鳥居がないことに違和感を覚えながらも中に入ると、手水舎にも兎、社殿にも兎と、境内は兎づくし。その名のとおり、ツキを呼ぶという御利益に、ぜひあやかりたいものだ。

道沿いにしばらく歩くと、左手に門前通りと刻まれた石柱が見えてくる。その奥が、古刹「玉蔵院」。境内には太鼓橋が架かり、白い玉石を敷き詰めた前庭とシダレザクラが目を引く。残念なのは、境内を横切る舗装道路の存在。街の中心にあり、交通渋滞緩和のためには仕方ないのかもしれないが、少々興ざめた気持ちになる。そんな私の気分を、レトロな「裏門通り」の雰囲気や和ませてくれた。

再び中山道に戻り、JRの線路と交差する浦和橋を渡る。北浦和～与野駅間をひたすら歩くと、さいたま新都心の超高層ビル群が徐々に大きくなっていく。けやき並木を通り過ぎ、風と波をイメージしたという「さいたま新都心」駅の駅舎を通過して西側へ。埼玉県の木・けやきが植えられているけやきひろばから、改めて超高層ビル群を見上げてみる。一息ついた後、「Chatting Tower」などのモニュメントを見ながら、遊歩道を散策。円形ドームの「さいたまスーパーアリーナ」の横を抜け、大宮ほこすき橋へ。

橋を渡るとすぐ横に、「氷川神社」の一の鳥居がある。ここから神社まで、十八丁(約2km)のけやきを主とした並木の参道が続く。実は、この参道が本当の中山道で、江戸時代に参道の両側にあった民家を、現在の中山道に移し、宿場町として整備したのだという。せっかくなので、この参道を歩くことにした。色づいた葉が秋の深まりを感じさせ、時折吹く風も心地いい。二の鳥居から先は歩行者道となり、三の鳥居をくぐると、いよいよ境内に入る。昔ながらの面影をそのまま残した本殿は、凛とした空気の中で、不思議と落ち着いた空間を創り出す。中世の時代から、身分を問わず多くの人々に参詣されていた理由が、なんとなくわかるような気がした。

お参りを済ませ、桜の名所・大宮公園へ。ポート池のほとりに座り、今日一日を振り返りながら、いつまでも、豊かな緑と共存する街であってほしいと思った。

参考文献：『埼玉ふるさと散歩 さいたま市』(さきたま出版会)

▶玉蔵院の北側、旧中山道から県庁第二庁舎北側までの道。今はなき県庁の裏門に通じる道ということから、この呼び名が付いたらしい。道は舗装されているが、昭和チックでレトロな店の看板に懐かしさを感じる。

玉蔵院前庭

▶平安時代の創建と伝えられ、地藏信仰の寺として長い歴史を持つ宝珠山延命寺玉蔵院。浦和は、本尊の木造地藏菩薩像(一木造りの平安仏)を拝むために、人々が集まってできた町だともいわれる。多くの指定文化財を所蔵しており、特に1780年建立の地藏堂、シダレザクラなどは、一見の価値がある。



つき調神社の兎

▲室町時代から月待信仰の拠点として信仰され、地元では「つきのみや神社」とも呼ばれる調神社。鳥居がなく、狛犬の代わりに兎の彫刻が参拝者を迎える。御利益は、運否天賦の「ツキはツキを呼ぶ」とのいわれから、幸運を授かると信仰されている。



裏門通り

